

聖徳太子と芸能

石井 公成

「(聖徳太子)はいなかった。実在したのは、ぱっとしない皇族の厩戸王だ」という、鬼面人を驚かせる説が一時期流行しました。マスコミも面白おかしく報じていましたね。聖徳太子に関する伝承には、後代に作られた荒唐無稽な話が多いのは事実ですが、「いなかった」説は推測ばかりのあまりにも強引な主張でした。現在の学界では、推古朝を聖徳太子の時代と見るのは誤りであるものの、太子が当時随一の権力者であった蘇我馬子大臣とともに推古天皇を支え、様々な活動をしたことは事実として認められています。太子からすれば、馬子は大伯父かつ義父であり、推古天皇は叔母かつ義母であって、この三人は一族なのです。そのうえ、「厩戸王」というのは、生前はこう呼ばれたのではないかと戦後になって推測されて生まれた名であって、古代の文献には出てきません。

その聖徳太子はいろいろなもの祖とされて来ました。これは、蘇我氏の本宗家の蝦夷・入鹿らが後に滅ぼされたため、蘇我氏がやったことがかなり太子の業績とされるようになったことも一因ですが、それだけではありません。仏教は巨大な文化体系ですので、仏教を導人するとなれば、建築・美術・

音楽・製紙・医療その他の最新技術を取り入れることになり
ます。ですから、仏教を推進した太子がいろいろなもの祖
とされるのは、決して不思議ではないのです。

芸能もその一つです。仏誕会や盂蘭盆会などの法要を盛んにした太子が仏教芸能に関わったことは確実であり、伎楽の面が多数残されている法隆寺と、その楽所が長らく日本の音楽・舞楽を支えた四天王寺が、日本の仏教芸能の重要拠点であったことは疑いありません。ただ、世阿弥などは「世子六十以後申楽談儀」で、太子が臣下の秦河勝に命じて申楽(能)を始めさせたと述べているものの、これは後代になって生まれた伝承です。(一)聖徳太子が実際に関わった芸能、(二)太子を題材とした芸能、(三)太子を始祖とする後代の芸能起源伝承、という三つは、区別する必要があります。

たとえば、太子を尺八演奏の元祖だとする伝承もその一例です。太子の伝説化を進めた鎌倉時代の「聖徳太子伝古今目録抄」では、太子が馬に乗って法隆寺から四天王寺に向かう途中の椎坂で、尺八を取り出して曲を吹くと、それに感動した山神が出現して舞ったものの、太子に見られて恐れのおま

り舌を出したため、その様子が舞楽の「蘇莫者」となって四天王寺で伝えられており、「法隆寺御舍利殿」の「種々宝物」のうちに中国の竹で作られた尺八があるのが太子のその尺八だ、と記しています。しかし、現在、我々が見るような尺八は、太子が亡くなった後に唐で完成されたものです。そのうえ、法隆寺所蔵の尺八は八世紀になって生まれた六孔・三節の雅楽用のものですので、古いことは確かであるものの、太子の遺品とすることはできません。

なお、「蘇莫者」というと、法隆寺は聖徳太子の怨霊を鎮めるための寺だと説いてベストセラーとなった『隠された十字架』で、梅原猛が奇説を書いていたことが思い出されますね。梅原は法隆寺の聖霊会において舞楽の「蘇莫者」を見て太子の怨霊だと直観し、「蘇莫者」とは「蘇我の莫き者、蘇我一門の亡霊という意味」であって、蘇我氏の血を引く太子の怨霊だと考えたのです。しかし、中国では「蘇莫遮」という表記となっていることが示すように、これはこの舞を指すシルクロードの言葉を漢字で音写したものであって、個々の漢字には意味がなく、蘇我氏とは何の関係もありません。この種のあやしい説については、私の「聖徳太子研究の最前線」ブログの「珍説奇説」コーナーで詳しく解説しておきました。いずれにしても、この伝承が示すように、四天王寺が早くから太子関連の芸能と関わりが深かったことは確かです。実際、長らく別れたままだった父と息子が四天王寺でめぐりあう能の「弱法師」をはじめ、太子関連の芸能は四天王寺がらみのものが多く、法隆寺は意外なことにあまり登場しないの

です。法隆寺でも、内部に太子の生涯を描いた絵を描いた絵殿が早くに作られ、僧侶が長い棒で画面を指しながら説明する「絵解き」がおこなわれていたのですが。

その法隆寺は金堂や五重塔がある西院と、夢殿を中心とした東院から成っており、東院の中でも夢殿は聖徳太子を象徴する建物とみなされてきました。日本最初の百円札も、聖徳太子の肖像と夢殿の絵を左右に配置しています。しかし、夢殿はもともと法隆寺とは別の寺でした。若草伽藍（法隆寺の前身だった寺院遺跡）と平行して建てられた聖徳太子の斑鳩宮が、長子の山背大兄王の時に蘇我入鹿の軍勢に襲われて焼失した後、荒れ果てたままであったのを法隆寺のやり手の僧であった行信が悲しみ、母親から聖徳太子信仰を受け継いでいた光明皇后が支援して、その地に太子を祀る上宮王院、つまり夢殿を建立したのです。夢殿が八角であるのは、当時の天皇の墓が八角墳であったことに基づく可能性があります。その夢殿には、行信と光明皇后が、太子ゆかりの品とされるものを次々に施入していきました。法隆寺に組み込まれたのは十二世紀の初め頃です。

こうして夢殿は太子記念館のような存在となったものの、中世には宣伝上手で芸能も盛んであった四天王寺が太子信仰の中心となります。夢殿の評価が大きく高まったのは、東京大学で哲学を教えていたアーネスト・フェノロサが文部省の調査委員となり、岡倉天心を助手として明治十七年（一八八四）に夢殿を調査したことがきっかけでした。夢殿の扉を開けさせ、秘仏とされてきた本尊をぐるぐる巻きにしていた長

い白布を外したところ、救世観音像が姿を現わしたため、フェノロサは衝撃を受け、この像をミケランジェロの作品などと並ぶ世界的な傑作と絶讃して話題になったのです。フェノロサは後の回顧録で、開けると寺が崩壊すると懼れる法隆寺僧たちの反対を押し切り、誰も見たことがない秘仏を自分が初めて世に出したような書き方をしていますが、実際には明治の初めに国が調査をしていました。梅原もフェノロサも同様ですが、聖徳太子については、近代になっても伝説が作られ続けているのです。ノストラダムスの予言本でベストセラ―作家になった五島勉が、聖徳太子はノストラダムスのように地球の危機を予言していたのだと説いた本も出し、かなり売れたことも忘れられません。

さて、日本美術の魅力に目覚めた天心は、実質的な校長として東京美術学校を運営し、フェノロサを教員に迎えて学生たちを育てました。その天心に評価され支援された安田靉彦は、大正元年（一九一二）に瞑想する太子を題材とした「夢殿」を文展に出品し、最高賞を得ています。明治以後の新しい日本画の傑作と称されるこの絵は、「唐本御影」と呼ばれるお馴染みの聖徳太子の肖像画の風貌に基づき、精神性の高さをうかがわせる様子で瞑目瞑想している太子を描き、太子と夢殿のイメージを変えました。法隆寺に秘蔵され、明治になつて太子の直筆と伝えられる「法華義疏」などの宝物とともに皇室に献納された「唐本御影」は、それ以前は広く知られておらず、一般人は絵解きがなされた聖徳太子絵伝の絵や、童形の南無太子像、父用明天皇の病氣快癒を祈る姿とされる

孝養太子像、あるいは威厳に満ちた摂政像などによって太子の容貌とされるものに接していったのです。

太子絵伝のもととなった太子の伝記で最も古いのは、養老四年（七二〇）に撰進された『日本書紀』の記述です。仏教を導入しようとする蘇我馬子らと反対する物部守屋・中臣勝海らとの合戦の場面では、馬子たちの軍勢が劣勢となったため、十四歳であつて軍勢の最後に随っていた太子が、白膠木の木を刻んで四天王を彫り、勝たせていただけたら寺を建てますと誓願して進軍したところ、木に昇つて矢を盛んに放っていた守屋を舍人の迹見赤檮が射落とし、勝利することができたため、後に四天王寺を建立したと記されています。ところが、平安時代以後に次々に現れた聖徳太子伝では、守屋を討ち取るために太子が軍勢の先頭切つて勇ましく戦う様子を強調するようになりました。

太子が弓で守屋を射殺す場面を描いた太子伝まで生まれたのですが、仏法を興隆した太子が殺生するのはいかがなものかということになったようで、後の太子伝では、太子の臣下であつた秦河勝が大活躍して守屋を打ち倒す様子を強調したものが増えていきました。ただ、それでも殺生がおこなわれることには違いありませんので、工夫がなされました。つまり、守屋が仏教導入に反対して戦つたのは、自分が合戦で負けることによって仏教を広めるための方便だったのだと、敗死する寸前の守屋に言わせるようになったのです。しかも、守屋はその際、『法華経』中の名句を唱えたとされます。

井阿弥という能役者が作者と推定されている能の「守屋」

は、これらの太子伝の影響を受けて作られた作品です。この曲では赤檣は登場せず、太子が弓で守屋を射て、倒れた守屋の首を河勝が切り落とすことになっています。しかも、太子が放った矢は、天に高く上がったのち落ちて来て守屋の首の周りを回り、口の中に刺さったとされているのです。この「守屋」は、残念ながら早くから演じられなくなってしまいました。聖徳太子を題材として守屋合戦に触れている「太子」と「上宮太子」という二曲も、どういふわけか現在は廃曲となっています。

ただ、聖徳太子伝承を題材とする狂言の「太子手鉾」は、「いにしえも今も伝えて語るにももりやは法の敵なりけり」という和歌の内容を山場としており、守屋に触れています。この歌は、説法が巧みなことで有名だった雲居寺の瞻西上人が、ある邸宅での法要で説法した際、雨漏りがしたため、最後に濡れた袖をパツと打ち払い、「漏り屋」と仏敵である「守屋」をかけ、いずれも仏法の邪魔になる存在だったと詠んだ、と伝えられている歌です。

言葉遊びの歌ですが、インド仏教以来、仏教は經典でも説教でもこうした言葉遊びを盛んに用いていました。『古今和歌集』でも、関係ないものを和歌のうちに掛詞として読み込む「物名」の巻は、冒頭の十首のうち、八首までが仏教に関わる内容になっています。多くの能が示すように、能の詞章が掛詞だらけであるのは、能の役者たちが多武峯や興福寺などの寺に奉仕しており、寺の論議や法要後の芸能で用いられた言葉遊びの影響を受けていたことによります。

能の「守屋」にしても、秦河勝は合戦に先立って、「君主は海、臣下は河にたとえられるのが通例であって、私の名も『河勝』であるのに、臣下にすぎないお前が『勝海(海に勝つ)』などという名であるのはおこがましい、宇治川や淀川が海に勝てるのか」と中臣勝海をあざ笑っています。これも、名を利用して言葉遊びの一種ですね。狂言も能と同様に仏教および言葉遊びと関係が深く、十六世紀末頃に書かれた現存最古の狂言の梗概集である『天正狂言本』では、百三番の狂言のうち、半数近くが仏教に関する内容となっています。

なお、南北朝頃に成立したと推測されている『秋夜長物語』では、文武両道にすぐれているながら仏教の学問・修行に励むことのできずいた比叡山の僧、桂海は、愛し合っていた美しい少年に入水自殺されたため、心を入れ替えて修行に励んで雲居寺の瞻西上人となったのであって、その少年は実は長谷寺の観音の化身であったとされています。実際の瞻西上人は、阿弥陀仏や回りの菩薩たちが往生人を迎えに来る様子を、仏像を引き出したり、お面をかぶった行列として演じてみせたりする迎講を盛にしたとされており、これが各地に広まって民俗芸能となっています。現代になると、聖徳太子の伝記をボーイズラブとして描く山岸涼子『日出処の天子』のよくな漫画も刊行され評判となりましたが、聖徳太子、芸能、言葉遊び、少年愛は、こんな形でつながっていたのです。

(いしい こうせい／駒澤大学名誉教授)

第467号

国立能楽堂

特集 聖徳太子と芸能

石井公成

令和四年十一月

国立能楽堂12月主催公演のご案内

定例公演 12月7日(水)午後1時開演

狂言 素袍落

善竹 彌五郎
(大蔵流)

能 逆矛

替装束
白頭

梅若 紀彰
(観世流)

終演予定午後3時45分頃

定例公演 12月16日(金)午後5時30分開演

◎演出の様々な形

狂言 樋の酒

山本 則孝
(大蔵流)

能 天鼓

盤渉

本田 光洋
(金春流)

終演予定午後8時頃

普及公演 12月10日(土)午後1時開演

解説・能楽あんない
家族再生の物語

小田 幸子
(能狂言研究家)

狂言 内沙汰

佐藤 友彦
(和泉流)

能 竹雪

武田 孝史
(宝生流)

終演予定午後3時45分頃

狂言の会 12月23日(金)午後1時開演

◎千利休生誕五百年

狂言 御茶の水

茂山 宗彦
(大蔵流)

狂言 禰宜山伏

大蔵 基誠
(大蔵流)

狂言 煎物

野村 萬斎
(和泉流)

終演予定午後3時15分頃

料金 (定例・普及公演)

正面 5000円

脇正面 3300円 / 学生 2300円

中正面 3000円 / 学生 2100円

〔狂言の会〕

正面 4700円

脇正面 3300円 / 学生 2300円

中正面 3000円 / 学生 2100円

*障害者の方は2割引です。詳細はチケットセンターまでお問い合わせください。

チケット 予約開始 11月10日(木)午前10時 / 窓口販売 11月11日(金)

TEL 国立劇場チケットセンター 午前10時~午後6時
0570(07)99000
03(3230)3000(二部P電話等)

WEB <https://ticket.njac.go.jp/>

窓口 午前10時~午後6時 ※窓口販売用に別枠
でのお取り置きはございません。

プレイガイド チケットぴあ <https://pia.jp/>
e(イープラス) <https://eplus.jp/>

国立能楽堂からのお願い

*開演5分前のベルが鳴りましたら、お早めに「着席ください」。

*大きな荷物の客席へのお持込みは、「遠慮ください」。

*携帯電話、スマートフォン等電子機器の電源はあらかじめお切りください。新型コロナウイルス接触確認アプリをインストールされている場合は、マナーモードに設定をお願いいたします。

*上演中はお静かに。私語、雑音は「遠慮ください」。

*ご購入のお座席で「鑑賞ください」。移動は「遠慮ください」。

*小さなお子様がお声をたてたり、泣かれたりした時は口ブリーにお休みください。

*見所、広間での飲食は「遠慮ください」。

*後方のお客様へのお気づかいをお願いします。

*上演中、場内での写真撮影及び録音・録画は固くお断りいたします。

*お席を離れる際は、必ず携帯電話をお持ちください。

*急病または「気分が悪い方は、「遠慮なく係員にお申し付けください」。

*全公演字幕表示がございません(普及公演の解説を除く)。(日本語・英語)
*公演の詳細につきましては、ホームページをご確認ください。